

東海の古代

第292号 2024年12月

会長 : 畑田寿一
編集 : 石田泉城 投稿先アドレス : toukaikodai@yahoo.co.jp
HP : <http://furutashigakutokai.g2.xrea.com/index.htm>

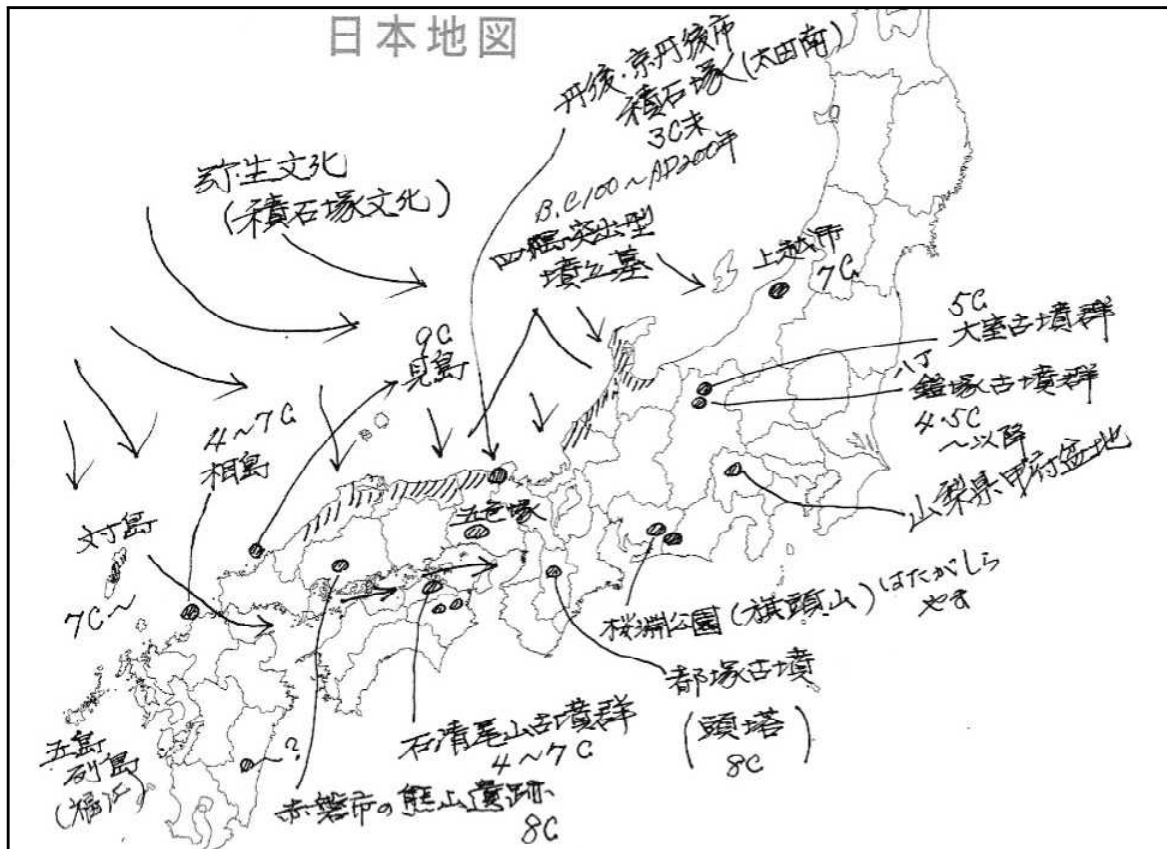
積石塚古墳の伝播

刈谷市 酒井 誠

1 はじめに

積石塚古墳は、高句麗系の渡来人が運んだ文化であるとはよく言われる。

日本各地にある積石塚古墳の分布をみると、次の図ようになっており、四国の香川県高松市や徳島県に多く分布する。この文化が入ってきた九州を見渡すと、長崎県（対馬）、相島（福岡県糟屋郡新宮町）、山口県見島、宮崎県などに分布する。そこから離れた、長野県の千曲川の辺にある須坂市の八丁塚古墳、大室古墳が有名である。愛知県から静岡県の浜松市にかけても積石塚古墳が見られる。全国の分布の状態や、形状を見てゆくと統一性が見られずに、これらの分布から積石塚のルートを探ることは不可能である。しかし、日本海側に多く分布しており朝鮮半島からの影響が大きいことがわかる。



2 積石塚古墳の位置と形態

各地の積石塚古墳を見ると、その積石塚古墳だけで古墳群が形成されることはない。ほとんどの場合が、周りには前方後円墳、円墳、方墳が建造されていて、その中に積石塚古墳も存在するのである。すなわち、この積石塚古墳を作ったであろう渡来人は、日本列島内の縄文系の人々との共同生活をしていることを表している。決して渡来人だけのコミュニティを形成し、縄文系の人々との関係を断っているのではない。

ここで四国を見ると、Y染色体のハプロタイプで日本人固有のD1a2a（旧D2）を持っている人が少ない結果が出ており、渡来人がたくさん入ってきていることがわかる。積石塚古墳がたくさん見られるところから当然の結果ともいえる。また当会報誌288号（2024年8月）にて、四国を含む京阪式アクセント地帯は、新羅などの渡来人が多く移住したとの私の仮説を示したがそれとも合致する。また、北九州の相島や対馬、長崎県に積石塚古墳が多いのも、渡来文化の流入ルート上にあって、たくさん作られたと説明がつく。

3 積石塚の形態変化

多くの渡来人がやってきて、京阪式アクセントの発信中心地は、奈良・京都・大阪・和歌山になるが、この地域に積石塚古墳が少ないのは、今一つ納得が行かない。しかし、私は、この日本の積石塚古墳の源流は、紀元前1600年頃から築かれたヘレクスル（モンゴルの積石塚古墳）と見ている。



＜ヘレクスル・馬の骨の埋葬＞



＜鹿石＞紀元前6～10世紀

ヘレクスルは、そのあと遼東半島の四平山積石塚古墳、ソウルの石村洞積石塚古墳へと受け継がれる。さらに、楽浪郡や帯方郡の中では、積石塚木槨墓や積石塚板郭墓が築かれるが、これも立派な積石塚である。そうした文化が朝鮮半島を横断して日本列島に入る。



＜中国・集安市 將軍塚古墳：高句麗＞5世紀末



＜楽浪郡・木槨墓＞3世紀



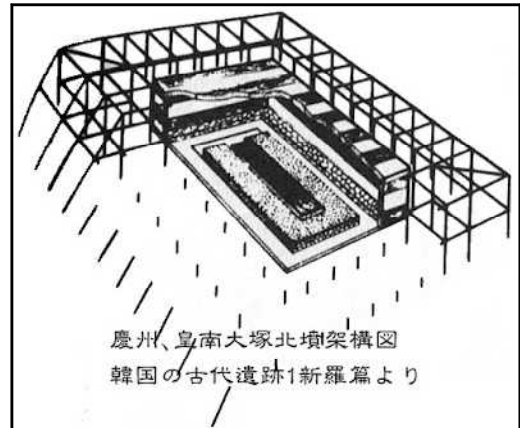
＜ソウル石村洞積石塚古墳＞ 3 世紀



＜慶州・積石塚古墳＞ 6 世紀



＜慶州天馬塚、木槨墓内部＞ 6 世紀初頭



慶州、皇南大塚北墳架構図
韓国の古代遺跡1新羅篇より

＜慶州木槨墓模式図＞



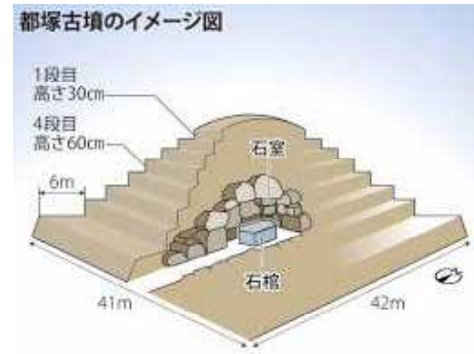
皇南大塚南墳発掘場面ー5世紀中頃
韓国中央博物館図録より

＜慶州 積石塚古墳発掘現場＞

上記には、石だけで囲まれた積石塚を挙げたのであるが、四隅突出型墳丘墓や前方後円墳も内部構造の見方を変えれば積石塚古墳と似た構造が見られる。出雲の西谷遺跡（四隅突出型墳丘墓）の断面を見てみればわかることであるが、これは明らかに木槨墓である。



＜西谷遺跡二号墳＞



＜都塚古墳・明日香＞ 6世紀末・蘇我稲目

上記の日本列島内の縄文系の人々と渡来人は、上下関係があったかどうかはわからないが、同じ地域の同じ時間軸の上で生き、おそらく混血も進んだことであろう。そのことは文化も合流して墳墓の形態もよい点は受け入れられて改良が加えられたものと思う。

したがって、京阪地区には渡来人が来なかったとみるのではなく、墳墓としては形を変えて縄文系の人々と渡来人は共同生活を営んだものとみる。京阪地区の古墳には、渡来人の影響が見られないのではなくて、前方後円墳にしても、横穴墓にしても必ず渡来系の優れた文化が内蔵されていると考える。



＜西谷遺跡二号墳埋葬部＞ 2世紀末



＜西谷遺跡二号墳 横穴部＞



＜兵庫県・五色塚古墳＞ 4世紀後半



＜相島積石塚古墳群＞ 4～7世紀



＜奈良県の頭塔＞ 8世紀？



＜岡山県赤磐市の熊山遺跡＞ 8世紀？

4 まとめ

日本列島内に入ってきた積石塚古墳と言っても内部構造はまちまちである。積石塚古墳を作り上げるためには、最低限の材料である小石や礫を手に入れられる場所でないと作れない。したがって、海岸や川の流れるところとなる。「土」を材料にするのに比べて崩れにくく水はけもよい。人海戦術をとれば子女であっても協力して参加できる。各地の積石塚古墳を見ると、均等に朝鮮半島から積石塚文化が伝わってきたとはいいいがたい。多くの伝播のルートがあって、各地の墳墓の形態の中に積石塚形態が混在しているように見える。

四隅突出型墳丘墓は、表面が石材でできているが、内部の本体は土である。しかし、本当の「棺」を納める部分を見ると、木の枠で覆われている。上記の兵庫県の五色塚古墳も前方後円墳であるが、葺石で覆いつくされており、まさに外形は積石塚と言わざるを得ない。

奈良市の中央部にある「頭塔」も内部の発掘がなされていないために目的のわからない建造物であるが、塚の一種と考えても差し支えないであろう。遠くのモンゴルや中央アジアで作られた積石塚古墳は、日本列島に文化が伝播するころには、ずいぶんと改良が加えられて、多くの形態を生み出していると考えることができる。

<補足>石村洞積石塚古墳群



※ 発掘現場を見てもすべてが石材からできているわけではなく、粘土質の部分が見られる。その下層部に竪穴式埋葬の棺が安置されている。

三河の国 鹿乗川遺跡にみる東国の初期古墳時代

一宮市 畑田 寿一

先回の「東海の古代291号」（2024年11月）で四国阿波の国の板野遺跡群を眺めてきた。ここには前方後円墳の前方部分が次第に撥型に開いていき、形が整った前方後円墳になっていく姿が見られ、それが瀬戸内海各地で同時進行する姿から、形の整った箸墓古墳は4世紀を遡らないことが判明できた。では東国はどのようなであったか。今回はその事例として三河の国の鹿乗川遺跡群（愛知県安城市）を取り上げてみたい。

1 鹿乗川遺跡群の概況

（1）鹿乗川遺跡群の場所

かつての矢作川は、現在の矢作古川を流れていた。その中流域の支流にあたる鹿乗川の左岸の丘陵地帯に鹿乗川遺跡群は存在する。

遺跡は川沿いに5Kmに及び広がり、弥生前期から古墳中期まで継続して繁栄した。遺跡の西側には丘陵地が広がっていたが、河川が少なく耕地化するには大規模な灌漑施設を必要とした。一方、矢作川沿いも洪水対策などが必須であったが、この付近では貴重な稲作可能地であった。



（2）年代別の状況

時 期	概 況
弥生前期	集落の形成が始まる。遠賀川土器
弥生中期	小規模集落が各地に広がる。西方系の凹線系土器
弥生後期	集落が拡大。方形周溝墓が構築される
弥生終期	集落が最大規模になる。各地の土器が発掘される 方形周溝墓の構築が減る
古墳前期	木製短甲、前方後円墳・後方墳が造られる 布留式土器、内行花文鏡
古墳中期	集落は衰退。かまど、滑石製勾玉、埴輪が見つかる

以上の様に、弥生終期（3世紀後半）にこの遺跡は最も栄え、全国各地との交流を示す土器が発掘されている。土器は以下の2種類に分類される。

- ① 外来系土器 西国、近畿、北陸、駿河、相模、南関東など
- ② 近隣系土器 大垣、一宮、清須など（線刻土器）

前方後円墳については4世紀に登場し、それまでは方形周溝墓が中心であった。

2 鹿乗川遺跡群の特徴

安城市埋蔵文化センターは「安城の弥生時代の始まり」と題する資料に於いて次のように述べている。

平成10年（1998年）から平成15年にかけて、古井町・桜井町において県営ほ場整備事業に伴う発掘調査が行われ、弥生時代前期の遺構や遺物が初めて明らかになりました。

稲作を生活基盤の機軸に据える弥生文化は、北部九州でまず成立し、弥生時代前期の内には西日本一帯に広がります。

弥生文化を受け入れた地域では遠賀川系土器と呼ばれる非常に共通性のある土器が使われることが特徴で、こうした文化を受け入れた東限が尾張低地部を中心とする愛知県西部です。愛知県東部では遠賀川系土器は客体的にしか受け入れられず、表面に粗い筋を施した条痕文系土器と呼ばれる土器が主体的に使われました。西三河はまさに遠賀川系土器と条痕文系土器が接する地域であったのです。

安城市埋蔵文化センターはこの地に稲作がもたらされた状態が愛知県の西部と東部では若干異なると説明しているが、その他にも、この地を特徴づけるいくつかの要素がある。

（1）交通の要所

尾張国と遠江・駿河国を結ぶ東海道と伊勢国から海を渡り信濃国に抜ける道の交差点にあたり、古くから交通の要所であった。

同様の交差点は東の豊川流域にも存在したが、規模的には鹿乗川遺跡の方が大きく、地域最大であったと考えられる。

（2）幅広い各地との交流

最盛期における外来系土器は中国地方から関東地方に及び、箸墓古墳からの出土土器と同じ様な状態を示している。出土数は5倍以上多く、箸墓古墳を超えている。これらの土器は一般には交易に拠るものと考えられているが、伊勢・吉備・尾張系の鍬も出土することから、人の移動によるものと考えられるべきであろう。なぜこれ程までに人の交流があるのかについては判然としない。いずれにしてもこの地は箸墓古墳と同様に全国各地の人が集まる場所であった。

（3）方形周溝墓

方形周溝墓は日本各地でみられるが、近畿、東海で最も多くみられる。この埋葬形式は古墳が造られるまでの上層部を埋葬する墓と考えられており、また複数の人物が埋葬されていることから一家の墓として使われたことを伺わせる。

方形周溝墓は弥生時代終期（3世紀末）まで造られた。纏向遺跡における初期の古墳は3世紀に遡るとするのが通説であるが、この地では方形周溝墓の次に古墳が造られる時代が訪れる。

（4）古墳

古墳は全体で18基造られた。前方後方墳（二子古墳）、前方後円墳（姫小川古墳）などが最古の古墳と考えられており、いずれも4世紀初めの構築にあたる。

前方後円墳と後方墳はほぼ同時代に造られるようになった。恐らく円墳からスタートするものと方形周溝墓や方墳からスタートするものがあり、複数の氏族の存在に拠るものではないか。

古墳の大きさは、80m程度が最大で豪華な副葬品は見られず、三角縁神獣鏡の数も少ない。この点からもヤマトとは少し違った独自の風習が感じられる。

3 まとめ

(1) ヤマト政権との関わり

土器などの出土からはヤマトとの関係を窺わせる点もあるが、方形周溝墓など独自の風習や土器の形状が存在する。「東海文化圏」が存在するとすれば鹿乗川遺跡はその中心地にあり、4世紀初めでは近畿や西国とは緩やかな関わりを持っていたのではないかと考えられる。

紙面の都合から詳細を省略したが、桃の種（亀塚遺跡）、大型建物の具材と思われる台輪（寄島遺跡）、千木、棟持ち柱建物などが出土し、纏向遺跡との相違点は「卑弥呼」だけとも考えられる。各地から集まった人々が一堂に会するには同じような環境が必要であった。

(2) 全国の土器が集まる理由に対する1つの考察

3世紀後半から4世紀にかけて国内の交易ネットワーク拠点は原の辻（壱岐）、三雲・比恵（北九州）、出雲、吉備、河内、纏向、近江、丹後などに存在した。その中で鹿乗川遺跡は最も東に位置したと考えられる。それをもって狗奴国の存在を主張する説もあるが、稲作の普及に伴い農地を持たない民が仕事を求めて各地の拠点に集まり都市型の集落を造った。彼らは戦国時代の黒鉄衆のように周辺の土地を開拓し灌漑設備を整備し、作業が完了すると次の拠点に移って行ったのではないかと考えられる。

(3) 新しい年代観

以上、鹿乗川遺跡を中心に東国の状況を眺めてきた。文化的にはヤマトに比べて少し遅れて伝わっているように感じる。しかし、ヤマト側の年代観が進み過ぎているとも言える。「卑弥呼がヤマトにいて列島を統治していた」、「崇神期に四道將軍の派遣により全国の国境が確定した」などの説は見直しが必要と思われる。

渡来人が持ち込む文化を取捨選択して独自の文化を作り上げていく姿こそが東海地方の特徴と言えるのではないかと考えられる。

■ 前回の例会の話題

・ 3世紀の古墳の謎

一宮市 畑田寿一

・ 『襲国偽僭考』について

瀬戸市 林 研心

・ 朝鮮半島における縄文人の畑作跡

名古屋市 石田泉城

・ 東海古代研究会DB検索システム(改良版)

一宮市 畑田寿一

・ 東海古代研究会掲示板

一宮市 畑田寿一

<https://tokai-kodai.1my.jp/>

試験中。試しにぜひ書き込みを！

■ 例会の予定

1 日時 令和6年12月15日(日)13時半～

2 場所 名古屋市市政資料館(参加料500円)

■ 投稿締切り日 12月25日(水)

□ 忘年会のお知らせ

12月15日の例会後に会場近くで開催

□ 投稿の方法

- ・ 会員に限定
- ・ 一太郎又はWORDファイルでメールに添付
- ・ およそ5千文字以下を目安
- ・ 文字はすべて12ポイントのMS明朝体
- ・ 40文字、42行の横書きスタイル
- ・ マージン、インデント等を付けない
- ・ 見出しの番号の付け方

1 2

(1) (2)

①、② 又は(ア)(イ)

- ・ 表題、内容は簡潔に
- ・ 文中に使用する写真や図表は別添付で。画素数は640×640以上、1000×1000ピクセル程度で鮮明なもの
- ・ 図書は『 』（著者、発行所、発行年）
- ・ 引用文は「 」(頁)で
- ・ 事務局で適宜色づけ、強調、体裁を整理するのでご了承ください。

送付先 toukaikodai@yahoo.co.jp 石田